

---

# **恋の大漁祭！**

紫陽花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋の大漁祭！

### 【Zコード】

Z2011B

### 【作者名】

紫陽花

### 【あらすじ】

恋愛は惚れた方が負けなんて、誰が言ったか知らないけど、一生分の勇気を振り絞り、気になる人に想いを伝える。届け言葉、伝わ  
れ想い！！

## 卒業式

クラスメートのすすり泣く声が聞こえる。

みんなそれぞれの思い出が脳裏をよぎっているのだらう。

そしてそれは校歌を歌うところで最高潮に達した。

目から大粒の涙を流しながら泣く子、泣きながらも必死に歌つて  
いる子、すでに何を言つているのか分からぬ子、これもまた、み  
んなそれぞれである。

私たちの卒業式は近年では例を見ないほど感動的なものだつた  
らしい。

もちろん私も田頭が熱くなる場面が何度もあつたが、この先のこ  
とを考えると、とても泣いてなどいられなかつた。

卒業式が終わり在校生の間をみんなが思い思いの顔で通り抜けて  
いくなか、きっと私の顔だけ緊張して強張っていたに違いない。

教室に戻り、担任の長い話が始まる前に昨晩、三時間かけて仕上  
げた『話があります。このあと裏庭まで来てください。』と書いて  
ある手紙を隣の席の千秋君に誰にも見つかれないようにそつと渡し  
た。

多分この瞬間の事は私と千秋君しか知らないこと、何だか一人だ  
けの秘密を作つてしまつたような気がして嬉しかつた。

もうこの後のこととはほとんど覚えていない。

担任の長い話の内容も、自分がどうやって裏庭に来たかも思い出そうとしても断片的な記憶しかない。

裏庭は日が当たらないせいか少し寒くて薄暗かつたが、人の姿は無く、告白には絶好の場所だった。

十五分は過ぎただろうか、千秋君はまだ来ない。

もしかしたら私が三年間、抱き続けたこの想いは伝えることがないまま終わりを告げてしまうのではないのだろうか、そんな考えが頭に浮かぶ。

これが私の運命なのかもしれない、仕方のないことだ、きっと最初から決まっていたことなのだ、そんな言い訳をしながら終わるのは嫌だった。

確かに千秋君と私では釣り合わないかもしれない。

千秋君は陸上部のエースで背丈も高く、屋外のスポーツをしているわりには色白で、顔もパッチリとした目と鼻筋が綺麗に通っているのが印象的かなりの美形で狙っている女子も多いと聞く。

今でも思う、どうしてこんなに競争率の高い、高嶺の花的存在の千秋君を好きになってしまったのかと……でも後悔はしていない、自分勝手だが悪いのは私ではなく、それだけ魅力的な千秋君がいけないので、そう思うことにしている。

少し弱気なことを言つてゐるが、自信がないわけではない、私は千秋君との接点をもつために陸上部のマネージャーになり、そのなかで一生懸命アピールしてきたつもりだ。

セレーナの女子よりは遙かにそして確実に成功確率は高いと思つ。

私は両頬を赤くなるほどの強さで一回呑こて気合こを入れた。

「よしー。」

わう言ひてガツツポーズをとる。

「何してんのマネージャー？」

どつぶつと妄想の世界に漫つていたとはいえ、後ろから近づいてくる人の気配に全く気づいていなかつた私は、突然のことに戸惑して

「キヤツ」

と有らぬもない声をあげてしまつ。

後ろを振り向くと千秋君のちょっと冷たい軽蔑した目が私を見ていた。

「な、なによ…私がガツツポーズをとつたらいけないの？ それに私はマネージャーじゃなくて千春つていうちゃんとした名前があるんだから」

なんて可愛くない言い方…自分が嫌になる。

「別にそんなことはないけど、面白いなつて思つただけです。マネージャーさん」

「意地悪」

「じめん、じめん」

本当にいけずな奴だ。 でも、いつもいつもすべて含めて好

きなのだからたちが悪い。

「じめんと言われただけで全てを許してしまひ。

恋愛とこうのはは惚れた方が負けだと呟つが、まったくその通りだ。

しかし、こんな馬鹿話をしているのも今だけかもしれない、  
ふと今日寝る時に嬉しさと哀しさ、どちらで枕を濡らす事になるの  
だらうか考えた。

「で、話つて何？」

「ここからが本番だ。

「えつと、あの～なんていつか……」

なんと歯切れが悪いことが、こじままで来て告白したことでもせり言つ  
かのようだ。

「だから、その～つまり……」

たつた一言いうだけなのに、どうしても出でこない。

その一言を言つてしまえばもう一度と千秋君と馬鹿話が出来なく  
なつてしまつかもしれない、そつ考えるだけで、とても怖くて哀し  
かつた。

私があなたに届けたい言葉はたくさんあるのに伝えたい想いは一

つだけ……

「あなたのことが大好きです。」

そうそれだけなのに…………？？

今のは誰が言った？ 私？

いや違う。

そのくらい今の私にだって分かる。  
周りを隅々までしっかりと見渡す。

薄暗くて少し寒い裏庭には私と千秋君の一人だけ、なぜか色白の  
はずの千秋君の顔は茹で蛸みたいに真っ赤である。  
少し可愛い千秋君、初めて見る顔だった。

でも千秋君の瞳は、私の瞳を見据えていて離さない。

あまりにも真剣に見つめてくるので、恥ずかしさに耐えきれずに  
目をそらしてしまった。  
少し惜しい」としたと後悔する。

「もう一度言ひ、あなたのことが大好きです。」

「え？」

驚く私、千秋君が私を好き？ そんなまさか、自惚れにもほどがある。

「いや違うな……千春のことが大好きだ。俺と付き合つてくれ  
もしかして夢をみているのかもしれない。

でも、先ほど呴いた両頬はヒリヒリとまだ痛む……やっと夢じや  
ないことに気づいた。

千秋君が私のことを好きなのだ。

頭で理解するよりも早く体が反応していた。  
嬉しさのあまり涙から零が落ちる。

私はその場に泣き崩れた。

「えつ！なんで泣くんだよ！ ひどこ」と言つたか俺？」

こんなに慌てる千秋君、はじめてみた。

「へ、ひつと違つて……お願いもう一度言つて」

「うそー四回目かよーー！」

こんなに困る千秋君、はじめてみた。

「お願い、ねつ！」

「仕方ないな、よく聞ことけよー！」

こんなに渋る千秋君、はじめてみた。

「山下千秋は河上千春のことが大好きです。」

「河上千春も山下千秋のことが大好きです。」

周りから見ればただのバカップルだろう。  
だけどそれでも構わない、千秋と一緒になら、なんにだってなれる。  
そんな気がする。

今日は私の知らない千秋をたくさん見ることができた。

これからまた千秋を隣で見ていきたい。  
心からもうひと息。

やひこねば、どひやら枕は壊したで濡らすといとこなるじし。

おわづ

(後書き)

読んで下さった方々ありがとうございました。評価、感想など何でも良いので待っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2011b/>

---

恋の大漁祭！

2010年12月1日07時26分発行